

満洲文字{ka}と{ke}の転写をめぐって

中村雅之

1. はじめに

満洲文字がモンゴル文字を改良して作られたものであることは周知の事実であるが、いくつかの字母においてモンゴル文字と満洲文字とで字形の異なるものがある。また、両者でほぼ同様の区別をしている二つの字形が、習慣的なローマ字転写法において異なる扱いを受けている例もある。ここでは{t}と{k}を取り上げ、特に後者のローマ字転写に関わる問題を検討してみたい。なお、特に断らない限り、モンゴル文字のローマ字転写は小沢重男(1997)に従い、満洲文字の転写は Möllendorff(1892)による¹⁾。ともに{ }をもって示す。

2. {ta}と{te}(ᠲ と ᠳ)

モンゴル文字では{ta}と{te}における{t}の字形は同一である。しかし満洲文字では書き分けている。{ta}の{t}はモンゴル文字と同形であるが、{te}の場合には縦線を上に延ばした字形を新たに考案している。いま仮にこの満洲文字独自の字形を{t̄}で示すことにすると、{t}と{t̄}は、後続母音によって次のような使い分けがある。

{ta} {ti} {to} / {t̄e} {t̄u} {t̄ū}

つまり、いわゆる母音調和に関わる区別を子音の側にも反映したものと見てよい。しかしながら、満洲文字におけるこれらの区別は、語頭形および母音字の前の語中形にのみ見られ、語末形および子音字の前の語中形においてはただ一つの字形しかない。そのため、この字形の区別を反映した翻字をしている研究者はいないようである。

3. {ka}と{ke}(ᠬ と ᠬ)

満洲文字{t}におけるのと同様の区別が{ka}と{ke}にもある。モンゴル文字の転写では{qa}と{ke}として区別されるが、満洲文字の転写ではともに{k}で区別がない。印刷体においては若干の差異を有するとはいえ、モンゴル文字の{qa}と満洲文

1) 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』, 大学書林.

Möllendorff, Paul Georg von(1892) *A Manchu Grammar, with Analysed texts*, Shanghai.

字の{ka}はほぼ同形である。またモンゴル文字の{qa}と{ke}、および満洲文字の{ka}と{ke}の区別が母音調和に関わる点も同じである。にもかかわらず、満洲語学においては伝統的に、明らかに字形の異なる文字をともに{k}で転写して区別しない。

モンゴル語学と満洲語学におけるこの扱いの違いはなかなか興味深い問題であるが、これには前項の{t}の状況もいくぶんか影響しているように思われる。満洲文字{t}の場合には、二種の字形を区別するものの、後続母音によって完全な相補分布をなし、音韻論的に区別する必要がないばかりでなく、実際の発音上もおそらく区別を認めるのが困難であったと推測できる。そのために転写上も区別をしなかったのである。一方、{k}の場合には、満洲語{ka}は口蓋垂音の[qa]、{ke}は軟口蓋音の[ka]で、聴覚印象においても相当の違いがあったはずであるが、後続母音によって相補分布をなすことから、{t}の場合と同様にただ一つの{k}で転写したわけである。

ところで、相補分布の状況については、厳密に見れば{t}の場合と完全に同じではない。いま暫定的にモンゴル文字と同様に{q}と{k}で二つの字形を区別すると、満洲文字における状況は次のようである。

{qa} {qo} {qū} / {ke} {ki} {ku}

{t}の場合と比べると、{i}と{ū}の扱いが異なっている。{ū}には複数の音価があったと考えられているのでひとまず措くとして、中性母音の{i}について見ると、{ti}の場合には男性母音と同様の扱いであり、{ki}の場合には女性母音と同様に扱われている。満洲文字におけるこのような整合性のなさも、{t}{k}ともに転写に際して音韻論的な解釈を優先させた理由の一つと考えられる。

もう一つの可能性として考慮に値するのは、西洋人の満洲語研究が盛んになってきた頃の 19 世紀の満洲語では、純正(?)の満洲語を話す役人は少なくなっており、すでにかなり漢化した発音になっていて、[q]と[k]の区別を明瞭に発音し分けられなかったのではないかということである。もともと全ての西洋人研究者が実際に満洲語の発音を耳にして満洲文字の転写を試みたとは限らないから、これは一つの可能性にとどまる。しかしながら、18～19 世紀のモンゴル語において、{q}が摩擦音の[χ]、{k}が破裂音の[k]で、全く異なる音声であったことを考え合わせると、満洲語はそれよりは遙かに相補分布を認めやすい(したがって二種の文字を同一の{k}で転写しやすい)状況にあったことは間違いない。

なお、モンゴル学者であるシュミットやリゲティによる満洲文字の転写では、モンゴ

ル文字と同様に、口蓋垂音と軟口蓋音を{q}と{k}のように区別しているようである²⁾。これはモンゴル文字に慣れた者の立場からすれば至って自然な措置と言えよう。

満洲語学において、本来は口蓋垂音と軟口蓋音を表したはずの二種の文字をもに同一の{k}で転写してきたのは、おおむね上述のような事情によると思われるが、その背景には、音声言語としての満洲語が衰退し、その音声研究が深化しにくい状況があったと思われるのである。

2)シュミットやリゲティの転写法については次の書による。

Hiu, Lie(1972), *Die Mandschu-Sprachkunde in Korea*, Bloomington: Indiana University.